

森本 義晴 *Yoshiharu Morimoto*

HORAC グランフロント大阪クリニック院長

✉ ivfceo@gmail.com

## 第71選

『前世療法—  
米国精神科医が体験した輪廻転生の神秘』

ブライアン・L・ワイズ 著

山川紘矢・山川亜希子 訳

(PHP 研究所, 269 ページ, 定価 562 円 + 税)

私は産婦人科医です。産婦人科医は「人の生き死に」に出くわすことの多い職業です。どの科の医師でもそうなのですが、特に生まれてくる瞬間と死ぬ瞬間に頻回に出会うので、産婦人科医の多くが不思議な霊的体験をしていると思います。私はあるとき、入院中の卵巣がんのおばあちゃんの部屋を訪れました。そのおばあちゃんは、お花がいっぱい咲いている神様の近くに行ってきたと言っていました。そして翌日、悲惨な末期がんなのに、幸せに包まれるように息を引き取りました。また、お産のときの出血でほとんど死にかけた患者は言いました。向こうの世界へ行こうとしたとき、随分前に亡くなった義父が出てきて追いつかれたというのです。そして、その瞬間、私の懸命に呼びかける声が聞こえて意識を取り戻したというのです。そのとき、無意識の患者が急に目を開いたことを記憶しております。

また、私は胎教を通して、お母さんたちや子供たちから多くの不思議な証言を聞きました。私は、ユング心理学をベースにした胎教プログラムを実践してい

て、今までに1万人の胎児を教育した経験があります。胎教を受けた子供は、心が温かく、好奇心が強く賢いのです。さて、その子たちが5、6歳になると、さまざまな「胎内記憶」を話してくれます。この記憶は6歳以上になると消えていき、それはおそらく心の奥深く、いわゆる無意識の領域に格納されてしまうのではないかと考えています。この記憶にも色々あって、胎内で自分が羊水に浮かんでひっくり返った経験などです。ある5歳の男の子は、胎内で見たものを絵に描いてくれました。その絵にはなんと胎盤と3本の血管からなる臍帯が描かれていました(図1)。そして、次の子供たちの証言は衝撃的でした。4歳と5歳の男の子がいました。上の子が言うには、「ママ、僕たちはママのことを、ママが小さいときから知ってたよ。ママが大きくなるのを待って、僕が先に来たの」これは何でしょう？ 子供が作り話をしているとも思えません。私は現在、体外受精をメインの仕事にしています。卵子と精子を毎日見ている、どの瞬間から人間になるのかいつも不思議に思っています。こうしてみると、赤ちゃんは「作る」のではなく「来る」のですね。

余談になりますが、チェコの心理学者スタニスラフ・グロフは彼の名著『脳を超えて』<sup>1)</sup> のなかで、人間の心の地図を「意識の作図学」として示しています。私たちが活動する場である意識の領域の下には、大きな無意識の領域があって、その中心部分を分娩前後の体験が占めていると言っています。そして、そのもっと奥のほうに前世の体験領域があるそうです。そういう心の奥に格納された記憶は、何らかのきっかけで意識の領域に出てくることがあるのです。